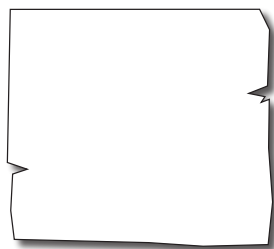


# 7 THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE 7つのワクワク枠 ふたりのコンパス③

## 第6フレーム

「On」



「Off」

木岬 さんぽ  
KIMISAKI SAMPO

私がかっちなら、  
あなたはこっちよね

彼女<sup>る</sup>瑠音<sup>ね</sup>、おじいさん…と支え合う  
思春期さんぽのフルーツフル青春物語

SAMPO FRUITS



## ふたりのコンパス③

### 『Off On』

### プロローグ

126

しばらくの間、水平線の方を眺めていたおじいさんが、ふいに、口を開いた。

「誰かがよかれと思って紡ぐ言葉——それがそのまま、役に立ったり、ためになったり、ありがたかったり… そんなときも、確かにあるじゃろう。

じゃが、一方がな——それをそのまま鵜呑みにしたり、それについて特定の解釈しかあり得ないと思ひ込んだりすることで、害になったり、傷ついたり、ひどい目にあったり… そんなときも、ありうるんじゃよ」

「——ん？」

「それは、たとえば過去に自分自身で紡いだ言葉であったとしても同様じゃろう」

「——んん？」

「じゃから——言葉は、“誰が紡いだ言葉か”よりも、“誰にとつて、どんな意味のある言葉か”、“誰に何をもちたらす言葉か”の方が、実際は、はるかに重要なんじゃ」

「——んんん？」

「なぜじゃと思う？」

「——」・・・「——たとえ、ある状況で、ピッタリ合う言葉であっても、——別の状況では、ズレた言葉になってしまうから？」

「うむ。その通りじゃ。言葉にも“相性”がある。恋愛とも呼吸法とも同じじゃな」

「——じゃあ、どうしたらいいの？」

「はて、どうしたらいいんじゃろうかな？」

「——」

「——うむ。では、さっそく、次のフレーム、第6フレームを紹介しよう。

きっと、その答えにたどり着くための、よいヒントの1つになるじゃろう」

「——1つ？」 そう尋ねながら地図を差し出した。

「そうじゃとも」 おじいさんは地図を受け取ると、それをゆっくり裏返した。

「では、行くぞ」

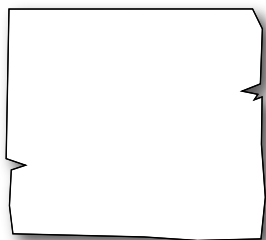
「はい、お願いします」

音楽——テーマ曲イン  
♪ハーモニー Harmony  
タイトル流れて。  
——音楽フェード・アウト

127

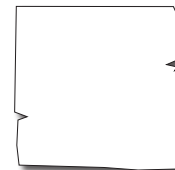
# 第6フレーム

『On』



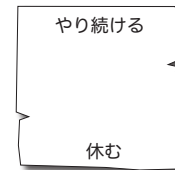
『Off』

『On』



『Off』

『On』



『Off』

「『<sup>オフ</sup> <sup>オン</sup>』じゃ」おじいさんは、<sup>い</sup>そう言いながら  
紙の下側と上側を順番に指さした。

「そうすると——

例えば、“<sup>たと</sup>休む人生が『Off』の方向にあるなら、  
<sup>なに</sup>何かをやり続ける人生が『On』の方向にある”って  
ことだよな？」と僕。

「そうじゃな。

<sup>いま</sup>今のおまえさんにとっては、少なくとも、そのへつ  
<sup>かん</sup>へつ感<sup>かいしょう</sup>が解消されて、やる<sup>き</sup>気が自然に湧いてくるまで、  
<sup>あたま</sup>頭を使う勉強の方は、しばらくお預け—— いわば“頭-お休みモ  
ード”の<sup>せんたく</sup>選択がふさわしいじゃろう」

「——うん」

「あー、ちなみにわしは、<sup>あさはや</sup>朝早くからの<sup>にくたいらうどう</sup>肉体労働で、<sup>からだ</sup>体をたくさん  
使っておるから—— <sup>ごご</sup>午後からは、たいてい“体-お休みモード”  
に入<sup>はい</sup>つとる」

「アハッ！ それが、おじいさんにとっての<sup>ひるね</sup>昼寝だったんだね？」

「そうじゃとも。

しかも、<sup>たん</sup>単に<sup>よこ</sup>横になって<sup>からだ</sup>体を休めているだけとは限らない。とき  
には、<sup>しょうらい</sup>将来のことを<sup>おも</sup>思い描いておったり、<sup>えが</sup>かつての<sup>おも</sup>思い出<sup>で</sup>を<sup>あじ</sup>味わっ  
ておったり、<sup>めいそう</sup>瞑想に<sup>あたま</sup>ふけておったり… <sup>な</sup>頭の中が<sup>かつぱつ</sup>活発に<sup>はたら</sup>働いてお  
ることがある。じゃからこそ、<sup>ひるね</sup>昼寝イコール<sup>すいみん</sup>睡眠だとは限らない。

——<sup>すこ</sup>少しは<sup>み</sup>見直したじゃろ？ <sup>み</sup>アッハッハッ！

「アハハッ！」 ——<sup>み</sup>とても見直した。

## 128

帰宅すると、家族はみんな留守だった。

心笑君がプレゼントしてくれた『北の国から'87初恋』の録画ビデオや、我が家にあった『北の国から'89帰郷』の録画ビデオを鑑賞しながら、しばらくの間、リビングでくつろいだ。

それから、自分の部屋に行くと、好きな曲を聴きながら、自分で撮りためた“お気に入り写真集”を眺めつつ、のんびりすごした。

それらの合間に、たまに自分の呼吸状態を観察してみた。

——おお、確かに、“ゆっくり、ゆったり深呼吸”になっているぜ。

そうして、自然に眠気を感じるようになった僕は、そのままベッドの上で横になると、目を閉じた。

## 129

目を覚ますと、外は薄暗い状態だった。

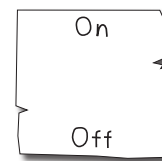
——夕方？ それとも朝？

時計を見ると、夕暮れどきであるとわかった。

起き上がってみると、そこに、さわやかな気持ちになっている自分、ヘトヘト感がなく、やる気を持って新たに勉強に取り組めそうな自分がいることに気づいた。

——これが、“本来の自分”ってやつ？

それから、とりあえず、『Off On』を書き入れてみた。



——こんな感じ？

そして——

「オンと…」 そう口にしたとたん、

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

フワリン！

ペーパー・コンパスが机を離れ、空中に浮き上がったんだ。

「ワッ！？」 コンパスの針の絵が浮かび上がり、クルクルと勢いよく回っている——。

「キャハハイ♪ ありがとう♪

これでやっと、思うままに——自由自在に空中遊泳できるようになったわ。キャハーン♪ 気持ちいい♡♪」

フワリフワリ——

「ちょっと待って、ちょっと待って、——ええ？！」

目を丸くしながら、気持ちよさそうに空中遊泳しているコンパリーチェを眺めた。夢だ。夢にちがいない！ 前にも似たような夢を見たよ。デジャブ夢だ。…

「キャハハ♪ それに、よりいっそう自由自在にしゃべることもできるし—— それから、自由自在に大きさを覚えることもできるよん♪」 コンパリーチェは、グーンと大きくなってみせた。「キャホン♪ わたしの上に乗ってもいいよ～♪」

「あ! ? や、やめとくよ」 あわてて断った。

あぶねえ。デジャブ悪夢だ。…

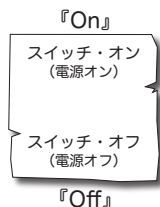
それから、僕は、試しに口にした。

「オフ?」

すると、コンパリーチェは元の大きさに戻り、そのまま机の上に舞い降りた。コンパスの針の絵も静止した。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

——電化製品とかのスイッチ・オン、スイッチ・オフと同じ?



それにしても、いったい、どこまでが現実? どこからが夢?

## 130

それが夢だとしたら、その夢は、全く醒める気配のない夢だった。しかも、目覚めすっきり感といい、見るもの聴くもの触れるものといい、どれもリアルそのものだった。

どうやら、すべてが現実らしかった。

思い切って、再び口にした。 「オン」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

フワリン!

「キャハハハイ♪ フレーム・オーナーさん♪」

しばらくの間、そのリアルなフワリフワリを、ポカンとしながら眺めた。それから、我に返った僕は、口を開いた。

「いやー、まいったぜ。本当に空を飛べるとは——

これって“物理法則がくつがえる”ってことだよな?」

「“鳥にとって空を飛ぶのが普通なように、わたしたちにとって空を泳ぐこと、空中遊泳が普通だよ”ってことなだけよ。人間だって、ロケットで地球から宇宙に飛び出たり、宇宙遊泳したりしているけど、物理法則には、ちゃんと従っているわよね? それと同じよ。だから安心してね」

「——」 …… 「——あ、でも、前から不思議に思っていたんだけれど、君らは何を食べているんだい?

そう、エネルギーは、どこから得ているんだい?」

「それはね、空気中のわずかな水分から、わずかな“光などを含む電磁波”を使って分解して取り出した水素や電子—— これらを活用しながらエネルギーを得ているの」

「——超ハイテクじゃん」

「キャハハ♪ だから、あなたたちと同じように食べたり飲んだりしなくても大丈夫なのよ♪ 二酸化炭素から酸素を作ることでもできるよ〜ん♪ 植物みたいに——」

「——。 ——え? じゃあ、どうしてオナラが出るんだい?」

「それはね。 ——イヤーン、もう、そんな恥ずかしいこと聞かないでよお」

「——」・・・——それにしても一体どんなしくみなんだらう？

それも、ちゃんと物理法則に従っているから大丈夫よ♪

「——そうは言っても、一体全体、何がどうなって、どうなっているんだい？ ——このままじゃ、ゆっくり眠れないよ」

「——。——わたしたちは、空気を取り込んで生きているの。空気の中には、水、二酸化炭素、酸素、窒素…などの単純な分子だけでなく、ホコリ、生体高分子、化合物…などのやや複雑な物体も含まれているのよ。それらを活用するためには、私たちは“空気を食べる”必要があつて—— だから—— だから、でちゃうの。それは全くクリーンで無害なんだけどね」

「——。すごいじゃん！ 君らは空気を食べて浄化してくれていんだね！ まるで空飛ぶ空気清浄器だよ！ 全然恥ずかしくないよ！ むしろ誇りにしていくださいよ。カッコよすぎるよ」

「キャホホホーイ♪ どうもありがとう。

——だから、ゆっくり眠ってね。未来のガ、ク、シャ、さん♡♪」

「イエーイ♪ 学者の卵と呼んでくれーい♪」

「——ギェーイ」

「——。ギェーイ？ ギェーイって何だい？ ギェーイって——」

・・・って、もしかして——、——え？

そうで一す♪ わたしたちはツワリもするの一す♪

「ええ！？」

「キャハ♡ もう妊娠しているのよ。おなかの中に—— 新しい、いのちがいるの」

「だから、ちょっと待って、ちょっと待って、——ええ！？」

「——ギェーイ」

「——」・・・「——あれ、大丈夫？ つわりって、やっぱりつらい？」

「あら？ 優しいのね♪ “つわりは、どんなしくみで起こるの？”なんて質問しなくていいの？」

「そんな野暮な質問、今は、どうでもいいよ。それより、大丈夫？」

「——ええ、大丈夫よ。そりゃあ、つらい部分はあるけれど—— 新たな新しい、いのちを授かった喜びと、赤ちゃんがどうか無事に元気に育ってねという願いのおかげで、そのつらさをピョンと乗り越えられるって感じ？ キャハハ♡♪」

そこにいるのは、すでに—— 母親になるべく一步一步前進している、たくましいプレママだった。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

## 131

男性と女性が結婚した以上、それはある意味、自然な流れで——。

うーむ。・・・

「アッ！」突然、コンパリーチェが叫んだ。

「え？ どうしたの？」

「今、恥ずかしいこと想像してたでしょ？」コンパリーチェが鋭い質問を投げかけた。

「——ちょっと待って、待って。——っていうか、想像できないよ」

「それでも、想像する努力はしていた——」

「そりゃあ、そちらでは、どんなしくみなのかなって素朴な疑問が、  
なくもなかったような気もするけれど——」

「想像しようとチャレンジしていた——」

「——」・・・「ハイ。」

「ああ、やっぱりしてたのね！ えっちい！ ——近づかないで〜♪」

そう言うと、コンパリーチェは部屋の中をフワリフワリと飛び回った。かと思うと——「逃げろ〜♪ キャハハ♪」 そう言いながら、コンパリーチェは開いていた窓から外へ飛び出た。

「えっ!？」 窓辺まで急いで駆け寄った。でも、コンパリーチェは夕闇の中に消えていた。

「な? ——」・・・「まあ、そのうちまた帰ってくるだろう。」

そのとき、事の重大さを全く認識していなかった。

# 132

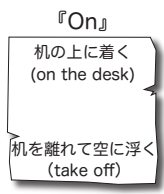
コンパリーチェのアップグレードの理由が、第6フレーム『Off On』であるのは、明らかだった。

例えば、コンパリーチェが机を離れて空に浮く、

テイク・オフが『Off』の方向にあるとすれば、コンパリーチェが机の上に着く、オン・ザ・デスク

が『On』の方向にある—— そんなプチ・マップも作れるだろう。

新しい“プチ・マップの作り方”は、ほかにも次々と見つかった。



切れる (オフ・ライン)  
(ペーパー・コンパスから、自転車から…) 降りる  
(地面から、地球から…) 離れる  
でかけている  
離れている、別々  
別れ

これは“いつもの自分”とは別だ  
“本来の自分”を失っている  
捨てる、手放す、失う、負ける  
忘れる (頭の中から消す…)  
あれ (これ)、片方、一部  
数、量… が減る  
マイナス、欠落する、減損する  
分ける、ずらす、はずす  
ずれている (タイミングがずれている…)  
釣り合いがずれている (バランスがずれている)  
(服が…) ゆるい、サイズがずれている  
間違い、偽、勘違い、ウソ、誤解、誤答…  
(『コトバ』と『カタチ』がずれている)

疑う  
課題と能力がずれている  
思いと現実がずれている  
夢にやぶれる、失敗する  
“しよう”と“したい”がずれている  
(『アタマ』と『カラダ』がずれている)  
中断する、変化する  
動きを止める、動作を停止する  
運動し始める、動き始める…

つながる (オン・ライン)  
(ペーパー・コンパスに、自転車に…) 乗る  
(地面に、地球に…) 着く、くつつく  
帰宅している  
そばにいる、一緒  
出会い

これは“いつもの自分”と一緒にだ  
“本来の自分”を保っている  
拾う、手に入れる、得る、勝つ  
覚える (頭の中に持つ…)  
あれもこれも、両方、すべて  
数、量… が増える  
プラス、積み重なる、蓄積する  
合わせる  
合っている (タイミングが合っている…)  
釣り合っている (バランスがとれている)  
(服が…) ぴったり、サイズが合っている  
正しい、真、真実、本当、正直、正解…  
(『コトバ』と『カタチ』が一致)

信ずる  
課題と能力が釣り合っている  
思いのままに実現する (自由自在)  
夢を実現する、成功する  
“しよう”と“したい”が一致  
(『アタマ』と『カラダ』が一致)  
継続する、一定の動きをする  
動き続ける、動作を維持する  
止まり続ける、静止し続ける…

『Off』

『On』

...

## 133

「ただいま〜♪」 コンパリーチェが帰ってきたのは、その翌日の  
日曜の正午過ぎだった。

「おっ！ おかえり。——どこ行ってたんだい？」

「キャハハーン♡♪ ヒ・ミ・ツ？」

「ったく——」

「そっかあ。出会ってから、手をつないだこともないとはねえ〜♪」

「——な！？ それって、もしかして——」

「キャハハホーイ♪ バレた？ 瑠音ちゃんのところに行ってたの  
よ。キャハ♡ 実際に会うと、もっとカワイイ子ね？♡」

「ああ！？ か、勝手なことすんなよ！ 彼女、すっげえビククリ  
するじゃん！」

「まあ、最初はね。でも、すぐ仲よくなっちゃった♪

いろいろおしゃべりしたり、悩みを打ち明け合ったり…

——キャハハホーイ♪ 彼女のお姉さんも妊娠中なんだって。

楽しいね。

それに、あなたのこと、いっぱい誉めといたからね。

イメージアップ間違いなしよ。キャハン♡♪

——しっかりね♡♪」

「オフ」

コンパリーチェは机の上に舞い降り、針の絵の動きも止まった。

## 134

しばらく深呼吸を繰り返した僕は、それを再び口にした。

「オン」

フワリン！

「キャハハホーイ♪」 フワフワ舞い始めるコンパリーチェ。

「——。あれ、さっきは—— ゴメン」 思わず謝った。

「キャハ？ さっきって、何のこと？」

「——」 ……

「応援しているからね。瑠音ちゃんと一緒に力を合わせて、夢を  
現らせてね♪」

「——あ、ありがとう」

「どういたしまして♪

——あつ、そうだ。わたし、そろそろ、お昼寝しなくっちゃ」

「あつと、そうだ。アレ、ソレ、妊娠、おめでとう。元気な赤ちゃん  
を産んでくれ」

「キャハ♡♪ どうもありがとう！♪

それに、なんと言っても、あのおまじないのおかげだからね♪

ランプベリーゴー、ランプベリーゴー♡♪

予定日は来年の春頃なんだって——。

楽しみ〜♡♪ 間に合えば、会えるよ♪ キャハハホーイ♡♪

——じゃあ、またね。おやすみなさ〜い♪」

「おやすみ」

コンパリーチェは自分から机の上に舞い降り、静止した。



—その日の夕方、彼女から電話が来た。

「ビックリしちゃったよ！ 紙がフワフワ浮かんで、しゃべっちゃうんだもん！」

「こっちは、5年経っても、いまだに驚かされているくらいだから、さぞかし驚いたと思う。ビックリさせて、ごめんよ」

「ううん。今は、もう大丈夫。—それにしても不思議ね？」

「ああ、全く不思議だよ」

「—アノ、確かに不思議で驚いたけど、いろいろ話せて、楽しかったよ」

「そう？ そう言ってもらえるとありがたいよ」

「それで— いつか、私にも、7つのワクワク粋のことを詳しく教えてもらえたら、うれしいんだけど、—ダメかな？」

「ダメもなんも、喜んで。なんなら、今すぐ、教えようか？」

「フフッ。ありがとう。でも、今日はもう遅いから、また今度お願いします」

「そうだね。では、また今度」

「勉強、頑張ろうね」

「ああ、お互い、頑張ろう」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

## 135

なつやす  
夏休み—

彼女と僕は、図書館で勉強することが多くなっていた。

音楽イン ♪夏 Summer

休憩時間に、あれこれ一緒に話をするのは、僕らにとっての、ささやかな潤いだった。

それぞれの苦手科目は、ちょうど、お互いの得意科目だったので、そのあたりを相談し合うこともできた。

ある日、僕が、彼女に相談したときのこと—

「古典ってさあ、無味乾燥で、さっぱり頭に入らないんだ。どうしようもないね？」と僕。

「フフッ。大昔の人も、今の人も…同じ人間よ。

そりゃあ、たしかに、言葉を始めとして、今と異なっているところも多いわよ。でも、感情の動きとか、男女の恋心とか…似ているところも、たくさんあるわ。

それに— 大昔の人たちが紡いだ言葉を、今こうして読めて、その意味がわかるのって、何だかすごくない？」

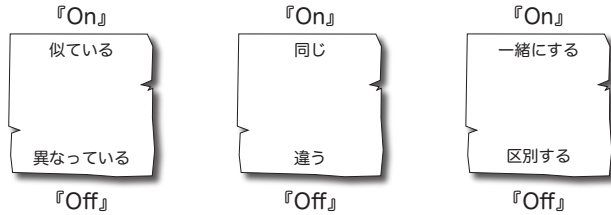
「まあ、言われてみれば、そうかも—」

「—あっ、そうだ！

いま  
今、ひらめいちゃった。

たとえば、異なっている-似ている、違う-同じも、『Off On』のプチ・マップで表現できそうよ。

くべつ  
区別する-一緒にすると同じように—」

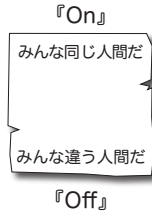


「あっ、そうだよ！

なるほど、これらも“ライフのあり方”の例なんだね」

「そうよ。

だって、みんな違う人間だも、みんな同じ人間だも、両方とも一理あるんですもの♪」



音楽 ♪夏 Summer 136 に続く

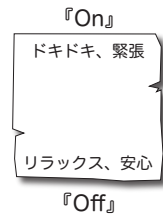
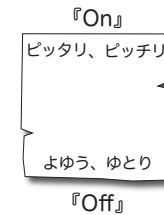
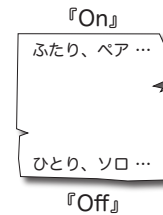
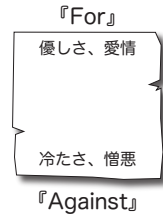
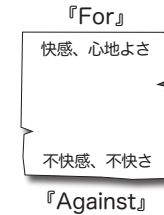
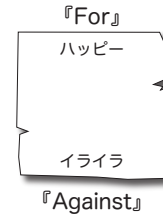
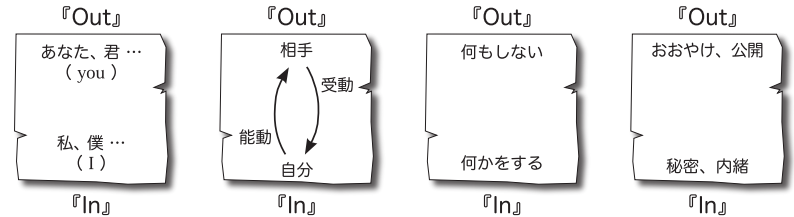
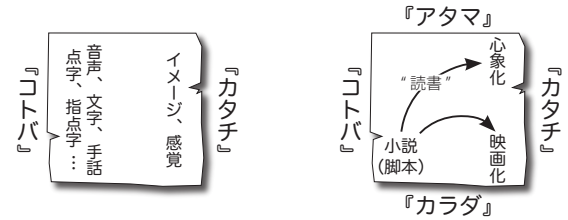
136

かのじよ  
彼女は、  
じよし  
女子であり——  
どくしょか  
読書家であり——  
しじん  
詩人であり——

そして、よき“プチ・マップ・メイカー”だった。

かのじよ つぎつぎ あたら  
彼女は、次々と新しいプチ・マップを完成させた。

それらの1つ1つは、どれもこれも、どことなく彼女のしかった。



音楽 ♪夏 Summer 137 に続く

## 137

その日、彼女と僕は、図書館での勉強の気晴らしに、近くの公園まで散歩した。

公園のベンチに座っているふたり——。

「ねえ、どちらかと言えば、私の人生が『カラダ』の方向にあるならば、あなたの人生は『アタマ』の方向にあるわよね？」と彼女。

「——え？ どうして？」と僕。

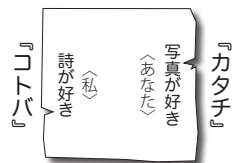
「だって、私は“快-不快とか、感情とか…”感じて決めることが、あなたよりずっと多いと思うから。

それに女子だから、なおさら体のコンディションについて敏感だと思う。

それに比べて、あなたは、“よい-悪いとか、しよう-するまいとか…”考えて決めることが、私よりずっと多いでしょ？」

「そう言われてみれば、そうかも——」 ——そうだったの？

「それに、どちらかと言ったら、“写真が好き”なあなたが『カタチ』の方向にいとすれば、詩が好き”な私は『コトバ』の方向にいと”なんてことも言えるかもね？」



「ああ、なるほど——」

——彼女の方が、フレーム・マスターにふさわしい？

音楽 ♪夏 Summer 138 に続く

## 138

「それに——」話し続ける彼女。「第3フレームでは、どちらかと言ったら、私がこっちなら、あなたはこっちはね」

「——」・・・「——え？」

音楽一時急停止 ♪夏 Summer

「だって—— どちらかと言えば——」彼女の顔は、もものように、ほんのり赤くなっていた。

「待った！ まずいよ。そんな——。女の子が赤くなりながら——」

「——え！？ 何のこと？」

——。——ええっ！？ 違うわ。私、そんなつもりで言ったんじゃないわ。ゼツタイ——」ももの何十倍も彼女の顔が赤くなったように見えた。

「——え？ どんなつもりで言っていたの？」

「それは—— これまで、どちらかと言えば、あなたの方から先に能動的に私に働きかけてくれていたじゃない？ 逆に私が受け身で後からって感じで——。そのことが言いたかったのよ。

だから—— 私が、いきなり、——そんなこと、言うわけじゃない」りんごのように赤くなっている彼女の顔——。

「——そ、そうだよ。ごめん」しまった。僕としたことが——。

・・・

「——。その、やっぱり—— 男の子だと、そんなふうに思っちゃうのかもね」

「いやいや、そんなことない、そんなことない。——って言うか、“そんなふう”ってどんなふう？」

「——」いちごのように赤くなっている彼女の顔——。

急いで視線を外した僕——。

しばらくの間、僕らは互いに視線をそらし合った。気まずい時間が流れた——。

「——赤いぜ。——いちごみたいに」と僕。

「——。そう言うあなたは、——スイカみたいよ」と彼女。

「——」・・・「——話題、変えようか？」

「ええ、そうしましょう」

そのときだ。

一匹の犬が、見ず知らずの人に連れられながら、こちらに近づいていることに気づいた。

——ラッキー♪

うん。ランプベリーのことを話題にしよう。

ナイスタイミング♪

「そう言えばさあ、僕も——」ランプベリーのことを話し始めようとした、まさに、その瞬間——僕は、目を大きく見開いた。

なんと、その犬は、ちょうどふたりの目の前で、片足を挙げ、木の幹に向けて用を足したのだ。そうして、その犬は、その人とともに何事もなかったかのように、その場を去った。

再び、気まずい時間が流れ始めた——。

・・・あんの、やるう～！！

——って、あいつは、ちっとも悪くない。うん。いつも通りの自然なことだ。・・・もうランプベリーのことは、話題にできな

いぞ。どうしたらいいんだ？ どうする？ 彼女が困っているぞ。

何とかせねば——。何とか——。

——ああ、頭の中が回らない。どうしよう？

・・・

「ブー！」彼女が突然吹き出した。「フッフッフ…。フフフ…

アハハハハ！ アハハハハ！ …」

「アッハッハッ！ アハーッハッハッハッ！ アハーハッハッハッ！

…」

ふたりは一緒に笑い合った。

音楽再開 ♪夏 Summer

のちに聞いた話によれば——

そのときのシチュエーションのみならず、僕の顔も相当おかしかったのだそうだ。——どんな顔だ！？

音楽 ♪夏 Summer 139 に続く

## 139

とにもかくにも——

彼女の言葉を借りれば、「“ライフのあり方の、ふたりの相違点”も、7つのワクワク棒は教えてくれる」という結論に至った。

たとえば——

考えることと感ずること、どちらを大切にしているか

過去と現在と未来、どれを大切にしているか

プロセスと結果、どちらを大切にしているか

## 140

なかみ がいけん たいせつ  
中身と外見、どちらを大切にしているか

こじん たいせつ  
個人とみんな、どちらを大切にしているか

のうどうせい じゅうどうせい たいせつ  
能動性と受動性、どちらを大切にしているか

らっかんせい しんちよう たいせつ  
楽観性と慎重さ、どちらを大切にしているか

ちから ちから たいせつ  
力をこめることと力をぬくこと、どちらを大切にしているか

なが め み たいせつ  
長い目で見て、どちらか、どれか1つだけを大切にしているか、

両方を、すべてを大切にしているか

…

などの“ライフのあり方”について

かのじょ じんせい ぼく じんせい  
彼女の人生がこっちなら、僕の人生はこっち。

だれ じんせい べつ だれ じんせい  
誰かの人生がこっちなら、別の誰かの人生はこっち。

さくしや じんせい さくしや じんせい  
この作者の人生がこっちなら、あの作者の人生はこっち。

…

というように――。

もちろん、この結論は、“ライフのあり方の、ふたりの共通点”

も、7つのワクワク枠が教えてくれることを意味していた。

また、この結論は、ある一個人が、あるときはこっち、あるときはあっちのように、ときに応じてどんな“ライフのあり方”を選んでいるかも、7つのワクワク枠が教えてくれるだろうことを意味していた。

音楽 ♪夏 Summer 140 に続く

としょかん かえ みち  
図書館への帰り道にて――

「7つのワクワク枠って、本当にいろんな“ライフのあり方”を教えてくれそうよね。まだ6つまでしか知らないけれど、なんだか本当にワクワクしちゃうね♪」 彼女が明るく言った。

「そうだね。

たと  
例えば――

いま たいせつ  
今を大切にしようなどの『イマ』ライフ、

しょうらい ゆめ も  
将来の夢を持とうなどの『ミライ』ライフ、

おも で あい  
思い出を愛そうなどの『カコ』ライフとか」と僕。

「そうね。

それから、

じぶん たの  
自分が楽しもうなどの『In』ライフ、

ひと よろこ  
人を喜ばせようなどの『Out』ライフとか」と彼女。

「そうだね。

ほかにも――

じゅうぶんやす  
十分休もうなどの『Off』ライフ、

いっしょうけんめい  
一生懸命やろうなどの『On』ライフとか。

けんこう がい  
健康を害するまいなどの『Against』ライフ、

けんこう まも  
健康を守ろうなどの『For』ライフとか」と僕。

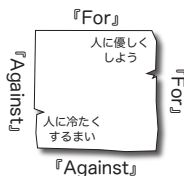
『ミライ』  
将来の夢を持とう  
今を大切にしよう  
思い出を愛そう  
『カコ』

『Out』  
人を喜ばせよう  
自分が楽しもう  
『In』

『On』  
一生懸命やろう  
十分休もう  
『Off』

『Against』  
健康を  
守ろう  
健康を  
害するまい  
『For』

「それに、人に冷たくするまいなどの『Against』  
ライフとか人に優しくしようなどの『For』ライフ  
とか。



——アレ？ “健康を害するまい”や“人に冷たくするまい”といっ  
た2つの『Against』ライフの例も、結局、どちらとも『For』ライ  
フの例になっていない？」と彼女。

「——アハッ。確かに、そうだね。“『Against』の『Against』は、  
『For』である”ってことなんだろうね」と僕。

「——どうして、こうなっているのかしら？ 『Against』ライフの  
2例を含めて、私たちが挙げたすべてが結局『For』ライフの例に  
なっているのは、なぜかしら？」

「さあ。それらが、いいなあって思うから？」

「じゃあ、どうして、それらが、いいなあって思うの？」

「——僕らが、それらを好んでいるから？」

「じゃあ、なぜ、私たちは、それらを好んでいるの？」

「——なぜだろう？ こっちが聞きたいくらいさ」

その日、僕らは、さらに、「7つのワクワク棒を持っていれば、書  
店、図書館、学校、社会…を含む、さまざまな“ライフのあり方”に  
出会える場で、方向音痴にならずに済むだろう」という予想にも至っ  
た。

音楽終了 ♪夏 Summer

## 141

なつやす さいしゅう び  
夏休み最終日——

キラキラし始めている海辺の砂浜に、ふたりで腰を下ろしていた。  
図書館からの帰りに特別に寄り道したのだ。

と お なら だい じてんしゃ  
遠くに並ぶ2台の自転車——。

かのじょ うた だ  
彼女が歌い出した。

♪ Joy of Life のメロディーにのせて

「白い雲 シュークリーム アイスクリーム♪

ドーナツ ワッフル ホットケーキ♪

あお そら う  
青い空に プカリプカリと 浮かんでいる♪

とり ほ およ  
鳥が羽ばたいて カメが泳いで ウサギがピョンピョン跳ねて♪

りす あな みず あ がっこう  
リスが穴ほって ゾウが水浴びして メダカが学校行って♪

ちょうちょう が ダンスして 花が咲いている♪

いちご もも すいか メロン ぶどう りんご パイナップル♪

みかん かき バナナ なし キウイ さくらんぼ♪

ゆた だいち み  
豊かな大地に たっぷり実っている♪

さんさん たいよう が キスして 地球が頬を染めている♪

イルカがジャンプしている 子犬がしっぽふっている♪

みんなが笑っている♪

あい・フィール・ハッピー♪

そー・ゆー・フィール・ハッピー♪

そー・ういー・フィール・ハッピー♪

ピピピーピピー♪

ゆー・フィール・ハッピー♪

そー・あい・フィール・ハッピー♪

そー・ういー・フィール・ハッピー♪

ピピピーピピー♪

タララ ラーラーラー♪

…

さくし きつまく ういか  
作詞作曲、初果 ひるね——」

パチパチパチ… 僕は拍手しながら「ブラボー♪」と言った。

かのじょ て せいちよう  
彼女は照れながら「ご清聴、ありがとうございます」と言った。

「——ところで、“ピピピーピピー♪”って、何のこと？」

「“ピピピーピピー♪”には、実は深い深い意味があるのです」

「——」

「——なんてことは、ございません。

ただ、ハッピーの“ピー”を並べてつなげただけ？」

「——え？」

「アハッ！ だって、これしか、このメロディーに合わせようがなかったんだもん。アハハッ♪」

「ブッハッハッハッ…！」こらえていた僕も、ついに吹き出した。

「ただ、この歌は——

いま わたし こち 今わたしなかもっとす  
今の私にとって心地よくて、今の私の中で最も好きになれる“メロディーや言葉”からできているのよ」

「——うん。自分で考えて生み出したんだね」

「——もちろん、最初に頭の中にイメージを作って、次にそのイメージをベースにメロディーや言葉を育ててきたという意味では、考えながら生み出していたわ。——ただ、私の場合、やっぱり“自分で感じながら生み出した”の方が、より正確かも。“好きだなあ。心地いいなあ”を追求する感じ？」

「ああ」

こころ なか  
心の中で『カラダ アタマ』を意識していた。

『アタマ』

考えながら  
生み出す

感じながら  
生み出す

『カラダ』

142

ザブーン、ザザザシュー…

く かえ なみ  
繰り返されている波——。

「それに—— たとえ頭の中のまっさらなスクリーンに思い浮かべた映像が始まりだったとしても、厳密に見れば、0からすべてを自分で生み出したことにはならないわよね？」と彼女。

「——え？ どういうこと？」と僕。

「だって“I feel happy.”なんて、既に誰かがどこかで使っていた言葉でしょ？ メロディーだって、あまりに単純だし」

「——うん。まあ、そりゃそうかもしれないけど——」

ザブーン、ザザザシュー…

そのとき、なぜか、ひたすら繰り返される波が、大昔から続いて  
いる“地球の鼓動”であるように感じられた。

「——それは、きっと、すべてにおいて同じだよ」と僕。

「——え？ どういうこと？」と彼女。

「0から生み出されていないことは、歌に限らず、自転車も、家も、  
料理も、詩や写真も、動物や植物も、自然も…どれも同じだつてこ  
とさ。

どれも既存の何かと何かが組み合わせることによって、新しい何  
かとして生み出されている——そんな一面を持っているのさ」

「——ええ、言われてみれば、確かにそうだよ」

「だろ？ もちろん、“ただ単純に組み合わせればいい”ってわけじゃ  
なくて—— やっぱ、その“好きだぞ”とか“よいぞ”とかって想  
い？ 感性？ 価値観？ これらも、とても大切になると思うよ」

「ええ、そうね。

——ねえ、話が少し飛んじゃうけど、組み合わせることも、きっと  
大切よね？」

「え？」

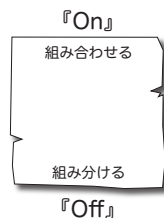
「組み合わせるだけでなく——」

「——そうだよ！ その方が、よりいっそう、  
のびのびと新しい何かを生み出しやすくなる」

「でしょ？ それに、そのおかげで材料も枯渇しないで済むわ」

「ああ。——“材料のリサイクル”って感じだね」

「フフッ。そうよね」



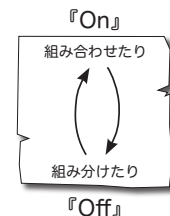
## 143

遠く離れた砂浜では、ある家族連れが、笑い声を上げながら波と  
戯れていた。海辺のキラキラが少しずつ増している——。

音楽イン ♪ Birthtime

「あらゆる多様な物質は、限られた種類の元素をもとにした、組み  
合わせたり、組み分けたりの繰り返しによって生まれている。

この組み合わせたり、組み分けたりのプロセスは、きっと、“新  
しい何かを創造すること”の普遍的な本質の1つなのさ」と僕。



「——つまり、組み合わせたり、組み分けたりのプロセスが、あ  
らゆる新しい存在の創造を支えているのね？」と彼女。

「きっと、そうだよ。それは、もちろん人間自身も例外じゃないよ」

「え？」

「だって—— 例えば、子どもは、“父と母の両方から、それぞれ  
の一部ずつを分けてもらい、それらが組み合わさった上で生まれて  
誕生している存在”じゃん」

「——。あ、そうね——」彼女の顔が桜貝のように色づいたよう  
に見えた。

「もちろん、誕生したあとも、さまざまな出会いや別れを繰り返  
しながら、子どものライフは創造的に生まれ続ける。



だから、それらの意味でも、子どもは“親の完全なコピー”ではないし、“親を単に足し合わせただけの存在”でもない

「——子どもは新しい存在なのね」

「そうさ」

音楽 ♪ Birthtime 144 に続く

## 144

海辺のキラキラがさらに増していた。

「あなたの“ライフ育ての材料”は、何ですかあ～？♪」 彼女が、ふいに、僕に明るく尋ねた。

「え？——。うーん。やっぱり、今は、湯川秀樹の人生が一番大きな材料かな」と答えた。

「ええ、そうよね。——あとは？」

「あとは—— ニュートン君、心笑君の人生とか、学校の先生の人  
生とか、岬のおじいさんの人生とか、ドラマや映画の中の登場人物  
の人生とか、家族の人生とか… ——あ、もちろん、君の人生も！」

「アハッ。ありがとう。——あとは？」

「あとは——」・・・「——え？」 思わず、彼女の方を見た。

一瞬、目と目が合った。

彼女は驚いた様子で視線をそらした。

音楽 ♪ Birthtime 145 に続く

## 145

「私の場合、一番大きな“ライフ育ての材料”は、——私自身の人生かな」 彼女は少し照れながら言った。

「え？」

「私、以前、自分が望む“ライフのあり方”を見つけたくて、いろいろな人生を参考にしていて時期があったわ。小学生のときの、その先生の人生はもちろん、家族や友人の人生、本や歌詞、映画やテレビの中の人生…を含めて、本当にいろいろ。

でもね、私、最終的に気づいたの。私は、私自身の人生を見失っちゃ、元も子もないんだなって」

「——」 心の中で『In Out』を意識していた。

『Out』

誰かの人生を  
材料にする

自分自身の人生を  
材料にする

『In』

もし、自分自身の人生を材料にすることをせず、誰かの人生を材料にするだけだったら、自分のライフを見失ってしまう？

「——もちろん、自分自身以外の人生も、とても大切だし、すぐで貴重な材料になりうるわ。

ただ、“ライフ育ての材料”は、その根本部分に“自分自身の人生”があって初めて本物になると思う。だって——私の“体験や思い出、将来への思い…”が、私の源泉なんだもん。

私は私らしく、子どもたちのための教師になりたいな。  
 大好きだった先生自身が、そうであったはずであるように——。  
 それが、私の本当の自己実現なんだと思う」

そうだ。僕は大切なことを忘れていた。

おいしくて心地良くて満足感を与えてくれるフルーツみたいな何かを生み出すこと。フルーツみたいな存在になること。

それが僕自身の理想のライフであったこと。

それが、かつて、漠然と思い描いていた将来の夢であったこと。

そうだ。

学問をして、ただ、新しい発見をしながら思う存分生きるだけじゃイヤだ。

学問の成果が、フルーツのようなおいしさにつながってほしい。

その取り組みの先に、フルーツがもたらすような心地良さや満足感があってほしい。

学問を通じて、自分らしいフルーツを生み出すこと——

それこそが、僕にとっての本当に実現したい夢だ。

僕は僕らしく、すべてのライフのための学者になろう。

湯川秀樹自身が、そうであったはずであるように——。

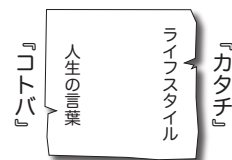
それが、僕の本当の自己実現——自分らしいフルーツの現出なんだろう。

音楽終了 ♪ Birtime

## 146

海辺のキラキラがピークに達している——。

「つまり、そうやって、自分自身の人生も材料としながら、組み合わせたり、組み分けたりを通じて、自分にピッタリの“人生の言葉やライフスタイル”を育み続けられれば、本当の自己実現——自分らしいフルーツの現出を果たせるんだね」と僕。



「ええ、きっとそうよ。

——ねえ、ところで、たった今あなたが話してくれたとき、

『Off On』や『カタチ コトバ』が心に思い浮かんでいたわ。

それに、“自分で感じながら生み出した”の方が、より正確かもと話していたときには、『カラダ アタマ』を思い浮かべていた」と彼女。

「——アハッ！ こっちもそうだったよ。

それに、さっき、君が“組み分けるのも大切”と話していたときにも『Off On』が心に思い浮かんでいたし、君が“自分自身の人生も材料”と話していたときには、『In Out』が心に浮かんでいたよ」

「あつ、私も！ ——おかげで、さっき、“自分自身の人生も材料”の話を、少し照れくさくても自信を持ってできた気がするわ。

アハッ♪」

「うん。そんなふうに、7つのワクワク<sup>わく たんじゆん りよう</sup>枠を単純に利用することもできるんだらうね」

「ええ、きっとそうだわ。

組み合わせたり、組み分けたりだけでなく、そうやって、それぞれのフレームを単純に利用しても、そのときの自分に役立つ“人生の言葉<sup>ことば</sup>やライフスタイル”にたどり着けることがあるのよ」

「そうだね。

それに、各フレームを単純に利用することによって、誰かの“ライフのあり方”——“人生の言葉<sup>ことば</sup>やライフスタイル”が、そのまま自分の役に立つのかどうか、チェックできると思うよ」

「そうすると、例えば、お気に入りの誰かの“ライフのあり方”——“人生の言葉<sup>ことば</sup>やライフスタイル”のよさや有用性を実感したり確信したりするためにも各フレームを利用できるのね？」

「きっと、そうさ。

さらには、各フレームを上手に利用できれば、誰かの“ライフのあり方”が、どのようにその人の役に立っているのかの理解も深まるだらうし——もしかしたら、その人のためにも自分のためにもなるような新たな“ライフのあり方”の、より効果的な提案さえもできるかもしれないよ」

「そうすると——最終的には、ふたりにとって役立つ“ライフのあり方”にたどり着くためにも、つまり、“ふたりが一緒に生きる”という目標を実現するためにも、7つのワクワク<sup>わく たんじゆん りよう</sup>枠を活用できる可能性<sup>かのうせい</sup>があるのね？」

「ああ、きっとそうさ」

“ふたりが一緒に生きる”

という目標を実現するためにも

7つのワクワク枠を活用できる

可能性はある

## 147

夏休み中の勉強が、お互いグングンはかどったおかげか、休み明けの最初の試験の成績は、ふたりともよかった。

その調子のまま、飛ぶように実りの秋が過ぎ——本格的な冬に入る頃、彼女から報告があった。

「私、推薦、受かった」

「え？——本当？」思わず僕は聞き返した。

「本当」喜びと照れがまざった表情を浮かべながら彼女は肯定した。

音楽イン ♪ Joy of Life サビの部分から

「いやっほう♪ やったじゃん！ おめでとう！」自分のこのように喜び、祝福した。

「ありがとう。あなたのおかげよ。今度は、あなたの番だからね」

「これで僕が受ければ、学部は違うけど、春から同じ大学に通うのかあ。——楽しみだあ！」

「フフフッ。そうね。楽しみ——」

「ようし、僕もゼツタイ合格するぞお！」

「うん。頑張つて。これ——」彼女の手ひらの上に何かがあった。

「ん？」手渡されたものを僕は見つめた。

「作ったの。——お守り」

「——ありがとう」彼女の想いを受け止めるかのように、そのお守りを受けると、大事に握りしめた。

このときの彼女の笑顔に、うれしさと楽しみと不安と祈り…が入り交じっているような気がした。

音楽フェード・アウト ♪ Joy of Life

## 148

その日の夜、勉強が一息ついた頃——

みかんをほおぼりながら、前に紡いでいた、My “人生の言葉”——“人生の言葉”For Myself を読み返した。

活動と休養——勉強と休みのリズムを大切に

コンディションを整えながら、本番までの日々を過ごそう。

本番では、解ける問題を解くこと、効率のよい時間配分に集中しよう。

そうやって、ベストを尽くせば、きっと合格できる。

大学に入ったら、好きな分野やテーマについて、ときに広く、ときに深く、のびのびと自由に学ぼう。

そうしながら、思う存分、自分の可能性を試してみよう。

また、そうしながら、学問を通じておいしいフルーツにたどりつく道、自己実現の道、自分らしいフルーツを現出させる道を探ろう。そうやって、自分が、学者として一人前になれるかどうかを見極めよう。

一方で、実際どのような進路を取ろうとも、一人の人間として成熟し続けよう。

それで、それから——

その上で彼女と向き合って、できれば彼女と一緒に——

...

それは、当時、自分の体験や実感…をもとに何回もバージョンアップしてたどり着いていた、自分にピッタリの言葉たちだった。

## 149

試験本番当日——

会場は多くの人たちで、あふれ返っていた。

すでに入場を済ませ、いったん試験室の席に着いた僕は、緊張の

あまり、トイレが近くなっていた。急いでトイレを済ませ——

席に戻った僕は、受験票を再び机の上に置こうとした。

すると—— ない？ ！！

さっきまで、あったはずなのに——。アレ？ ……

急いでトイレに引き返してみても、通り道をなぞってみても、な

かった。——まずい？

僕は、あせりを“ゆっくり、ゆったり深呼吸”で打ち消そうとし  
つつも、何らかの困難や面倒を覚悟しながら—— 受験票をなくし  
てしまったことを正直に受付の人に話した。

すると—— 「ああ、届いてましたよ。よかったね」 係員の方  
が、あっさり、そう言いながら受験票を僕に渡してくれた。

「あ、ありがとうございます」

そして、無事、再び試験室の席に着くことができた。

フー。助かったあ——。ありがとう。ありがとう。…

受験票を届けてくださった方のことを想い、心底、感謝した。

——お守りを握りしめた。

それから、試験の心得を思い返した。

ベストを尽くすんだ。

そのために、解ける問題を解くこと、うまい時間配分に集中する  
んだ。…

## 150

試験が終わって帰宅すると、彼女から電話が来た。

「試験、お疲れさま。——どうだった？」

「ああ、なんとか無事に——」

「よかった。——じゃあ、ゆっくり休んでね。またね」

「あっ、待った。——電話ありがとう。お守りもありがとう」

「ううん」

「なんとか合格している！ って感じだよ。ハハッ」

「フフッ。そうね」

「じゃあ、おやすみ。また今度」

「そうね。またね。おやすみなさい」

## 151

合格発表当日——。

当時、その地方大学の合格発表は、その地方のテレビ局によって  
中継放送されるのが恒例だった。テレビカメラが“合格者名簿”を  
じゅんぐりとなぞってくれるので、一人ひとりの合否が、そのテレ  
ビ放送を観るだけで、はっきりわかるのだった。

発表会場まで遠かったこともあり、まず、そのテレビ放送で合否  
を確認すると決めていた僕は、家のテレビの前で、今か今かと待機  
していた。

——いよいよ、その放送が始まった。 ドキドキドキ…

しばらくすると、自分が受験した医学部の合格者名簿をカメラが  
なぞり始めた。受験番号と氏名の列が画面上を流れている——。  
高鳴る鼓動——

ドキドキドキ… 名前があってくれ！ ドキドキドキ…

自分の受験番号は 270 番台——

合否が判明するタイミングは、その受験番号から、おおよその  
見当がついた。

—— 100 番台に入った。

ドキドキドキ… 頼むぜ！ 合格してる！

ドキドキドキ…

—— 200 番台に入った。

ドキドキドキ…

いよいよ自分の受験番号が近づいてくる——。

—— 230 番台、—— 240 番台、—— 250 番台

ドキドキドキ…

—— 260 番台！

ああ、もうすぐだ！

—— 270 番台！！

ドキドキドキ…

そして——

その番号を飛び越えたんだ。

ない。

当然、名前もなかった。

…

不合格——

人生の形どりの失敗——

ズドドドーン！！

## 152

家の外に出た僕は、自転車にまたがると、ペダルをこいだ。

こいで、こいで—— ひたすら、こいだ。

音楽イン ♪冬 Winter

途中で自転車を降りると、歩いて、歩いて—— ひたすら歩いた。

砂浜までたどり着いた僕は、腰を下ろし、そのまま、ボンヤリと  
海を眺めた。

ザブーン、ザザザシュー …

自分の能力のこと、将来のこと、彼女とのことについて、悲観的  
な考えが何度も心に渦巻いた。

まさに“絶望のどん底”であり、今にも崩れ落ちてしまいそうだった。もう何もかもがダメになりそうだった。

それは、明らかに人生の危機だった。

それでも——

それに対抗するべく——

おじいさんの知恵——自分自身のためのライフセーバーになってあげる知恵を必死に実践し続けた。

スー ハー スー ハー スー ハー …

ただ、ひたすら“ゆっくり、ゆったり深呼吸”を続けることに全力を注いだ。

どれくらいの時間が経ったのだろうか？

徐々に気持ちが落ち着き——

ようやく、前向きに物事を考えられるようになった。

音楽 ♪冬 Winter 153 に続く

## 153

…

つまり——

人生を変えた方がいいってこと？

新しい“ライフのあり方”を目指すべきだってこと？

“やりたい”だけじゃダメで、なおかつ、“やれる”ことをやれてこと？

彼女のことは潔くあきらめよう。

これは、もうどうしようもないことだ。

「ハア—」とりわけ深いため息が出た。

大学進学も、あきらめる？

——それとも、あきらめない？

夢も、あきらめる？

——それとも、あきらめない？

そう言えば、ニュートン君——心笑君は、すでに第一志望の首都圏の大学に合格を決めていたっけ——。

今頃、物理学者になるという夢の実現へ向けてまっしぐらなんだろうな——。

…

僕も学問をやりたいよ。

多くの人たちに—— フルーツのような何かを味わってもらいたいよ。

…

自分からこの夢を取ったら、僕は僕でなくなりそうだよ。

どうしたらいい？ ——どうしたい？

…

おじいちゃん—— それでも、ライフは、この上ない宝なんだろう？

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

「お〜い！」 そのとき、遠くから彼女の声が聞こえた。

## 154

「やっぱり、ここにいたのね。ハア、ハア、ハア…」 近くまでたどり着いた彼女が、息をはずませながら言った。

彼女は、なぜか赤ちゃんを抱いていた。

「——ど、どうしたの？」 その赤ちゃんを見ながら僕は尋ねた。

「——お姉ちゃんの赤ちゃんよ。ハア、ハア…」

「——」 ……

「——アハッ。ちょうど、子守を頼まれていて——。

そんな最中に、テレビで合格発表が始まっちゃうんだもん。

よりによって、家族みんなが外出したタイミングで結果がわかって——

「——」

「それで、居ても立ってもいられなくなって—— まず、あなたの家に行ってみたの。そしたら、夏岬君のお母さんが『自転車で、いつもの“チャリンポ”に出かけたわよ』って教えてくださって——『海の方に行くけれど、死ぬことはないから心配ないよ』とかって、お母さんに話したんでしょ？」

——それで、きつと、ここじゃないかなって。

——アハッ♪ ピタリ賞ね？」

「——。どうやって、ここまで？」

「え？ ——歩いてよ」

音楽イン ♪ Love

## 155

「——」 ……

「——12倍よね？ 自転車の」 彼女が口を開いた。

「——」

「あ！ この子を抱いているから—— さらに2倍で、24倍くらいとか？ アレ？」

「——」

「——うーん。ムズかしい」

「二十——七倍くらいじゃない？ よくわかんないけど——」

「——。——フフッ。よかった。元気そうで」 そう言って、彼女は明るく心笑んだ。

音楽 ♪ Love 156 に続く

## 156

赤ちゃんを抱いた彼女と僕は、砂浜に座っていた。

「あっ♪」 突然、彼女が小さく叫んだ。

「え？ どうしたの？」

「うん。笑ったの—— この子が。あ、また♪

——かわいいね」

赤ちゃんの笑みと彼女の笑み—— ふたつの笑みが向かい合って



そこにあった。

赤ちゃんのほっぺを得意気にツンツンとつついている彼女。

「私、知らなかったよ。赤ちゃんて、こんなに小っちゃなときから笑うんだね♪ 私、てきり、赤ちゃんて泣いてばかりいるんだとおも思っちゃっていたわ」 彼女は、うれしそうに、そう話した。

「——」 ……

僕も知らなかった。

「——フッ♪ 今、この子が『For』の方向にいとすれば——

あなたは、きっと『Against』の方向にいるんだよね。——。

もし「幸せ実感度”大会があったら、今のあなたは、きっと、この子に完敗ね」

「——」 ……

「——。——あなたも抱いてみない？」

「——いいよ」 —瞬戸惑った末に断った。

「いいから——」 彼女は、やや強引に、赤ちゃんを僕に抱かせた。

珍妙な時間が流れた。かと思うと——

「オギャー！！ オギャー！！ ……」 赤ちゃんが泣き始めた。

音楽フェードアウト ♪ Love

「——ああ、泣かせたなあ♪ ——おむつは大丈夫そうね。

ほら、あやして、あやして♪」

「って、どうすれば——」 …… うろたえ状態の僕——。

見かねた彼女は、赤ちゃんを抱きかかえると、うまい具合に

あやし始めた。

すると—— 赤ちゃんはピタリと泣き止んだのだ。

## 157

「——。カッコ悪すぎ——」 僕は、ポツリと、つぶやいた。

「——」

「——不合格だし。——期待に応えられなくてごめん」

「——。——気にしないで。

——あなたは、あなたよ。今回、合格していても—— いなくても」

「——」

「——私思うの。人生には、こういった社会的なハードルが、きっと、いくつかあるのよ。このハードルは、大学に入るときだけでなく、資格を取るときにも、就職するときにも、ポストを得るときにも、オリンピックに出場するときにも…同じようであって——。

社会の中で前進するために、誰もが乗り越えなきゃならないハードル—— 現実的なハードル」

「——」

「もちろん、何度もチャレンジして、やっと乗り越えられる場合もあったりして——」

「——」 ……

「この不合格は—— “何か大切なことを学べるチャンス”なのよ。きっと——」

「——」 ……

いつの間にかスヤスヤ眠っている赤ちゃん——。

「——。ねえ、お願いがあるの」と彼女。

「——どんな？」

「その—— 私<sup>わたし</sup>も、今度<sup>こんど</sup>、その岬<sup>みさき</sup>に連れて行ってほしいの。

私も<sup>わたし</sup>一緒<sup>いっしょ</sup>に行ってみたい」

「——。 ——別に<sup>べつ</sup>いいよ」 断<sup>ことわ</sup>る理由<sup>りゆう</sup>がないと思<sup>おも</sup>った。

「やったあ！」

「——」 . . .

この瞬間<sup>しゆんかん</sup>にも彼女<sup>かのじょ</sup>が社会的<sup>しゃかいてき</sup>なハードル<sup>の</sup>を乗り越<sup>こ</sup>えていたことに  
気づ<sup>き</sup>いたのは、ずっと経<sup>た</sup>ってからのことだった。

## 158

「ねえ、電話<sup>でんわ</sup>し合<sup>あ</sup>おうよ。これから、ずっと——。 そしたら、

私<sup>わたし</sup>が大学生<sup>だいがくせい</sup>らしくなったところを、いっぱい披<sup>ひろ</sup>露<sup>ろ</sup>できるわよね♪

そこから、たくさん刺<sup>し</sup>激<sup>げき</sup>を受けてね♪ それで、やる気が、

うんと高<sup>たか</sup>まって、勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>がサクサクはかどったりして。アハッ♪」

「——」

「それで—— そうやって、来<sup>らい</sup>年<sup>ねん</sup>、受<sup>う</sup>かればいいじゃない？

そうなれば、また一緒<sup>いっしょ</sup>になれるよ」

「——」

「1年<sup>ねん</sup>なんて、あつという間<sup>ま</sup>よ。 ——大丈夫<sup>だいじやうぶ</sup>。余<sup>よ</sup>裕<sup>ゆう</sup>よ」 そう言<sup>い</sup>つ  
て、彼女<sup>かのじょ</sup>は優<sup>やさ</sup>しく心<sup>こゝろ</sup>笑<sup>え</sup>んだ。

彼女<sup>かのじょ</sup>は、こんな情<sup>なさ</sup>けない僕<sup>ぼく</sup>のために、無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>して明<sup>あか</sup>るく振<sup>ふ</sup>るまい、

精<sup>せい</sup>一杯<sup>いっぱい</sup>、元<sup>げん</sup>気<sup>き</sup>づけようとしてくれているのだと思<sup>おも</sup>った。

彼女<sup>かのじょ</sup>の気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ちが、心<sup>こゝろ</sup>遣<sup>つか</sup>いが、ものすごくありがたかった。

彼女<sup>かのじょ</sup>の気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ちを察<sup>さつ</sup>すれば——

たとえ“今<sup>いま</sup>すぐ大<sup>だいがく</sup>学<sup>がく</sup>進<sup>しん</sup>学<sup>がく</sup>をあきらめる”という選<sup>せん</sup>択<sup>たくし</sup>肢<sup>し</sup>がありえても、そんなことは、とても口<sup>くち</sup>に出<sup>だ</sup>せないと思<sup>おも</sup>った。

「——ありがとう。これからどうすべきか、どうしたらいいか…

ゆっくり考<sup>かんが</sup>えてみるよ」と僕<sup>ぼく</sup>。

「——ええ、そうね」

「それに、ここまで、こうやって来<sup>き</sup>てくれて—— 本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に、ありが  
とう」 感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>の気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ちでいっぱいだった。

「ううん」 彼女<sup>かのじょ</sup>は、はにかみながら小<sup>ちい</sup>さく首<sup>くび</sup>を横<sup>よこ</sup>に振<sup>ふ</sup>った。

「バブバブバブ♪ どういたしましてでちゅう〜♪」 僕<sup>ぼく</sup>は、赤<sup>あか</sup>  
ちゃん<sup>あか</sup>と平<sup>へい</sup>行<sup>こう</sup>に並<sup>なら</sup>んで見<sup>み</sup>上<sup>あ</sup>げる体<sup>たい</sup>勢<sup>せい</sup>になって、赤<sup>あか</sup>ちゃん<sup>あか</sup>のような両<sup>りやう</sup>  
腕<sup>うで</sup>の身<sup>み</sup>振<sup>ぶ</sup>りを交<sup>まじ</sup>えて、あたかも赤<sup>あか</sup>ちゃん<sup>あか</sup>のセリフであるかのように  
言<sup>い</sup>ってみた。

「フフフ♪」 彼女<sup>かのじょ</sup>は笑<sup>わら</sup>ってくれた。

## 159

幸<sup>さいわ</sup>い——

“好<sup>す</sup>きな道<sup>みち</sup>を進<sup>すす</sup>むのが何<sup>なに</sup>よりだ。もし大<sup>だいがく</sup>学<sup>がく</sup>に行<sup>い</sup>きたければ、再<sup>さい</sup>チャ  
レンジしてもいい——” それが親<sup>おや</sup>の意<sup>い</sup>向<sup>こう</sup>だった。

その晩<sup>ばん</sup>、いろいろう考<sup>かんが</sup>えた僕<sup>ぼく</sup>は、新<sup>あたら</sup>しい“ラ<sup>かた</sup>イ<sup>はく</sup>フのあり方<sup>かた</sup>”を育<sup>はぐ</sup>  
むべく、新<sup>あたら</sup>しい My “人<sup>じん</sup>生<sup>せい</sup>の言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>”を紡<sup>つむ</sup>いだ。

まず、もう1年、大学合格プロジェクトに取り組む。

それによって、実力をつける。能力を高める。知力を磨く。  
感性を豊かにする。心を育む。人間性を高める。…

この1年は、大事なことを学べるチャンスだ。

その間、読書体験も積んで、視野を広げよう。

そうしながら、ライフ育ても取り組もう。

もし合格できた場合

→その中で、思う存分、夢を育めばいい。

もし合格できなかった場合

→そのときは、大学進学をあきらめて就職することもありうる。

その場合、たとえば大学進学をあきらめて就職することになったとしても、夢を持ち続けることは許されるはずだ。

学問と関係ないところへの就職を含めて、どんな進路をとろうとも、学問は続けられるはずだ。

やろうと思えば、いくらでも。

材料もいっぱいある。

本屋さんとか、公共の図書館とか…。

そうやって、自分らしく夢を実現させる方法を探究しながら、自分なりのフルーツを育て続けられればいい。

大学に入って初めて見えることもあるだろう。

それはそれで大事なのだと思う。

ただ一方で、大学を遠くから眺めるからこそ初めて見える何かもあるかもしれない。

大学から距離を置く方が、かえって発見しやすい何か

従来の大学や教室に属さない方が、かえって得やすい成果

…

そんなフルーツも、あるかもしれない。

どちらに転んだとしても、そこから何かを学びながら、自分らしい夢の実現、自己実現へ向けて前進できるはずだ。

どちらに転んだとしても、自分らしくフルーツ育てを続けられるはずだ。

彼女とのことは——

もし、このまま良好な関係を保てれば、それに越したことはないけれど——

もし彼女がこの関係を望まなくなったのなら、潔く身を引こう。

彼女には絶対迷惑をかけたくない。

僕らの関係がどうなるうとも——

彼女には絶対幸せになってもらいたい。

…

このとき、ふと、おじいさんの言葉——“幸せに生きるんじゃぞ”が、心に浮かんだ。

——おじいちゃんに似てきた？

## 160

高校を卒業して間もない雪解けの季節—— コンパリーチェとの  
別れの日を迎えた。

音楽イン ♪春 Spring

赤ちゃんペーパー・コンパスは、まだ産まれていなかった。

——どうやら、“間に合わなかった”らしいや。

それは、ちょうど、2階の自分の部屋で家の留守番をしていると  
きのことだった。

「大学は落ちたんだよ」 コンパリーチェに初めて報告した。

「ええ!？」 コンパリーチェは、しばしプルプルと震え—— それ  
から、「ああ、わたしのせいだ」と言った。

「バーカ、そんなわけないじゃん。これは自分自身のせいだよ。

“自分に、もっと実力があればよかった”ってことなんだ。

——まあ、人生長くやっていれば、いろいろあるさあ。

アッハッハッ! ——やっぱり、おじいちゃんに似てきた?

「ズズー、ズ、ズ… ヒィック、ズズー…」

「感謝しているよ。おかげで、この3年間、すっげえ楽しかったし  
——幸せだった。

こんなに彼女と仲良くなれたのも、こんなに勉強がはかどって  
成績が伸びたのも…どれも君のおかげでもあるんだよ。

——ありがとう

「グスン、グスン、ズズー、ズ… きっと、すてきなフレーム・マ  
スターになれるよ。ズズズ、ズズー ヒィック、ズズー…

夢が実現するように、応援しているからね。

間に合えば——」

「——間に合えば?」 間に合わなかったんじゃないの?

「あ、うん、いいの」

音楽 ♪春 Spring 161 へ続く

## 161

「——あ! もう、そろそろサヨナラの時間。

これから、いっぱい、いっぱい、いーっぱい、うれしいことがあ  
りますように——」 そう言うと、コンパリーチェは僕の顔にペッ  
タリまとわりついた。

「く、苦しいって。おなかの赤ちゃんに悪いよ」

「いいの。まもなく生まれるから大丈夫なの。よい刺激になるわ」

「いや、よくないんじゃない?」

「いいのよ」 顔にペッタリ。

そのときだ。 ——トウルルルー♪ ——トウルルルー♪ …

1階の電話が鳴り出した。

「あつ、電話。誰かしら?」 そう言いながら、コンパリーチェは  
離れた。 ——トウルルルー♪ …

「ゴメン。すぐ戻るよ」 そう言いながら、ドアへ向かって歩いた。

「あつ、ちょうど、もう時間。

じゃあね。バイバーイ♪ お元気で~♪」 コンパリーチェが別れ  
のあいさつをしたので、思わず振り返ってあいさつを返した。

「じゃあ、お元気で、さようなら。 ——って、すぐ戻るよ!」

## 162

急いで階段を駆け下りた僕は、すばやく電話の受話器を取った。

「ハイ、夏岬です。——ハイ、そうです。——ハイ、ハイ、ハイえ！？ ハイ、ハイ ——ハイ！ ありがとうございます！

——よろしくお願ひいたします！ 失礼いたします」

——ガチャ。 ゆっくり受話器を置いた。

それから僕は勢いよく階段を駆け上がった。

ダッダッダッ…

「ご、合格だってさ！ 辞退者が出たからって」

よく見ると、コンパスの針の絵も『Off On』の文字も、すっかり消えていた。

「——」 …… しばし呆然——。

全身の力が抜けた僕は、そのままヘナヘナとひざまずいた。

これで—— いいの？

とにもかくにも——

こうして僕にも春が来た。

音楽終了 ♪春 Spring

春休み—— この春から首都圏の大学に行く心笑君が、わざわざ家まで、あいさつに来てくれた。

「大学合格、おめでとう」と心笑君。

「ありがとうございます。井東君も、おめでとう。お互い、よかったね」と僕。

「ああ、そうだね。ありがとう。

——それと、初果陽さんとのことも、おめでとう」

「——え？」

「うまくいっているようで、ほっとしていたよ。

ふたりは、お似合いのカップルだよ」

「あ、ありがとう」

「——もう、めったに会えなくなるだろうし、きっと時効だと思っから、今話しておくよ。実は、高1の夏休みに、初果陽さんとバツタリ会って、彼女と話していたんだ。

——あのとき、君のことが話題になった」

「え？」

瑠音さんと心笑君の会話 in 高1の夏休み——。

「だれか、好きな人がいるのかなあ」 赤くなっている彼女——。

「——初果陽さんは、好きな人がいそうだね」

「——」

「——やっぱり、夏岬君？」

「え？ やっぱりって、——ばれちゃってた？」

「——」 うなづく心笑君。

「お願ひ。ゼツタイ内緒にしてて。

彼に、私の気持ちを知られたら、私耐えられない」

「——。——彼は、君に気があるような気がするよ」

「ええ?! どうしてわかるの?」

「——カンだよ。なんとなく、わかるんだよ。——親友だから」

「ちょちょっと待ってよ! ドキドキさせないでよ」…

「君たちが、うまくいっていると、周囲も幸せな気持ちになれる。

そんな、すてきなカップルだよ」めったに笑わない心笑君が、ほほ笑んでいた。

「——」言葉が出なかった。このとき初めて、心笑君が、心笑君らしく、ずっと僕らのことを陰ながら応援してくれていたのだとわかった。ありがたかった。とっても——。

「だから—— おめでとうより、ありがとうの方がピッタリだったかな。

僕は、遠くへ行くけれど、これからも、どうぞよろしく」そう言いながら、心笑君は、湯川秀樹と利根川進の特集記事がそれぞれ載っている科学雑誌2冊を餞別として、手渡してくれた。

「ありがとう。お礼を言うべきなのはこちらの方こそだよ。これまで、いろいろありがとう。こちらこそ、これからも、どうぞよろしく」

僕は、とっさに、餞別が、さも準備してあったふりをして、彼を玄関に待たせたまま、2階の自分の部屋へと駆け上がった。

餞別、餞別…

餞別になりそうなものを、必死に探した。

ふと、丸い石“アインシュタイン”に目が釘付けになった。

アインシュタイン——。

それから急いで階段を駆け下りた。

呼吸を整えながら—— おずおずと心笑君に“アインシュタイン”を差し出した。なぜか、手の震えが止まらない。

「いいのかい? なんだか、すごく大事そうに見えるけれど——」

「前々から、“アインシュタイン”と呼んでいたんだ。

物理学者を目指す君に、ぴったりだよ。きっと、いい、お守りになるよ」

心笑君は、何も言わずに“アインシュタイン”をゆっくり受けとると、自分の顔の前で握りしめ、しばらく目を閉じながら頭を少し下げ続けた。

そうしてから、心笑君は頭を上げながら目を開け、口を開いた。

「ありがとう。気持ちは十分受けとったよ。心の中で大事にさせていただきますよ」心笑君は、そう言って、“アインシュタイン”を僕に返してくれた。かすかに心笑みながら——。

## 163

同じ春から、彼女と僕は、大学生活をスタートさせた。

ふたりは、それぞれのアパートで、それぞれ一人暮らしを始めた。

その新しい大学生活の中で迎えた最初の初夏——

ふたりとも帰省した折に、約束通り、一緒に岬へ行った。

音楽イン ♪夏 Summer

おじいさんのいる岬へ——。

そう。それは、あれから、ちょうど7年目の初夏だった。

「おお。とっても、かわいらしい子じゃあ」 彼女を見たおじいさんは言った。

「——」 照れている彼女。

「おまえさんには、もったいないくらいじゃの？」 おじいさんは、僕に向かってそう言うてから、無邪気に心笑んだ。

「——」 きまり悪がる僕。

「では——」 おじいさんは何やら封筒を僕に差し出した。

「ん？ 何だい？」と僕。

「第7フレーム、最後のワクワク枠じゃ。この中に入っておる」

「お！？」 さっそく中を見ようとした。すると、

「おっと待った」と言って、おじいさんは、さえぎった。「中身は、あとで見てください」

「あとで——」

「——こいつは究極のフレームじゃ」

「究極！？」

「まあ、厳密には、究極と、——そう言われておる」

「言われているって——」

「何やら“究極の意味”を教えてください。その“究極の意味”は、ライフのパズルを解く究極のカギでもあるらしい。

じゃが、いまだかつて、その“究極の意味”に、たどり着いた者はおらん、——らしい。わしも、たどり着けなかった、——らしい」

「らしいって——」

「おまえさんなら、その意味に、たどり着けるかもしれない。

楽しみにしとるよ」

「——」

「早いもんじゃ。もう大学生かあ」 はるかな水平線を眺めながら、おじいさんは話し続けた。「懐かしいのお。おまえさんが、ここに初めて一人でやって来たときのこと——。おお、ランプベリーも一緒じゃったな」

「——」 . . .

「彼は大きなシャベルを持って、ここに宝探しをするためにやって来たんじゃよ」 おじいさんは、彼女に向けて話し始めた。

「え？」 少し驚く彼女。

「そして、わしよりもずっと小さな体で、全身が隠れるくらいまで穴を掘り続けよったんじゃ」

「ええー！？」 とても驚く彼女。

「——お嬢さん」

「はい」

「どうもこの若者は、熱中しすぎる頑張り屋さんであるらしい」

「わかります。——フッ。なんてたって、プチ・マップ作りにも熱中しすぎて、女子更衣室に入っちゃうくらいですから♪」

「アッハッハッハッハッ！」 おじいさんは笑った。

「——」 いつのまに、その理由を . . .

——あっ、コンパリーチェが、彼女に教えてあげたから！？」

——「イメージアップ間違いなしよ。キャハン♡♪」

笑いながら何度もかうなずいたおじいさんは、再び口を開いた。

「——どうか優しく見守ってやってください」

「はい！」 彼女の表情が、いっそう明るくなった。

## 164

しばらく視線を水平線に向けていたおじいさんは、ふいに口を開いた。「それでは—— いよいよ最後のお別れじゃな」

音楽イン ♪感謝別れ Thank you, See you.

「え？ 最後？ 何でまた——」と僕。

「これで、ワクワク枠を、7つともすべて知ることになるじゃろ？」

「あ！？ 寝ぼけたこと言わないでくれよ。最後なわけないじゃん」

「じゃが、来る理由が、もう——」

「あるよ」

「—— 首を少し、かしげるおじいさん。

「僕の実のおじいちゃんか実のひいおじいちゃんみたいな存在だから。——実の孫か実のひ孫のような存在だから、また来る」

「アッハッハッハッ！」 おじいさんは笑った。

「だから、笑うところじゃないって」

「——。若者よ—— ありがとうよ。

なんだか、むしように船出したくなってきたぞ」

「船出！？」

「そうじゃとも。——うむ。そうと決まれば、さっそく出発じゃ」

「ああ！？ 船出って、どこに向かって？」と僕。

「何のためにでしょうか？」と彼女。

「まあ、船出と言っても、ちょっとした航海、——プチ航海？

あるいは、ちょっとした船での散歩、——フネンポ？」

「ちょっと、わけがわからないよ」と僕。

「人生という旅路には—— 目的や意味が“ありそうでない”ときもあれば、“なさそうである”ときもある」

「——」

「それでは、若者たちよ—— さらばじゃ。達者でな」

「おじいちゃんも、お元気で」「お元気で行ってらっしゃいませ」

「ありがとう、じゃあに。——ああ、ちなみに、じゃあには、Journeyのしやれだぞ。アッハッハッ！」

そう笑ったつきり、おじいさんは歩き去ってしまった。

それから、しばらくすると——

おじいさんの船が出るのが見えた。

音楽フェード・アウト ♪感謝別れ Thank you, See you.

## 165

「行っちゃったね」彼女がポツリと口にした。

「ああ」僕は船を見ながら、うなずいた。

——何なんだよ、おじいちゃん。今日は、どこもなく、よそよそしかったし…。おじいちゃん、また来るかな。待っているよ。

そのまましばらくの間、遠ざかる船をぼんやりと眺めた。

——ん？

見ると、彼女が僕の顔を見ていた。

しばしの時間、ふたりは目と目が合い続けた。



かと思うと——

彼女は、目を閉じた。

！！！！

え？ これって—— ドキドキドキ……

僕は緊張しつつも、顔をゆっくり近づけた。

すると、彼女の唇に自分の唇がふれようとする、まさにその瞬間、

彼女が目を開けた。

——ん？

近すぎる、目と目—— 鼻と鼻—— 口と口——

目をぱちつかせている彼女。

そして——

彼女は再び目を閉じた。

## 166

水平線を眺めて立っているふたり——。

「よかった。ふたりとも合格して——」 彼女が、しみじみと言った。

「ああ」

「——コツコツ取り組み続けてよかったね。勉強——」

「——ああ」 喜びがじわじわと湧き上がるのを感じながら、かみし

めるように言った。

音楽イン ♪ Joy of Life

なぜだか急に、海に向かって大声で叫びたくなった。

「ワァァー！！」

すると——

「ワァァー！！」

彼女も、海に向かって大声で叫んだ。

ふたりして、心笑み合った。

それから——

僕は、海に向かって、力いっぱい叫んだんだ。

「大好きだあー！！」

すると——

「大好きいー！！」

彼女も、力いっぱい叫んだ。

さらに、ふたりして、心笑み合った。

たとえば、目と目が合うこと。

たとえば、鼓動が高鳴ること。

たとえば、ふたりがキスすること。

たとえば、ふたりが一緒であること。

たとえば、合格が、ふたりともであること。

たとえば、力いっぴいの叫びであること。

たとえば、ふたりが両想いであること。

たとえば、ふたりが、心笑み合うこと。

…

これらが、どれも『On』の方向にあることに気づいたのは、それから、しばらく経ってからだだった。

それが、おじいさんの“粋な心遣い”であったことに気づいたのも、それから、しばらく経ってからだだった。

ふたりとも、空と海と水平線の方を眺め続けていた。

両想いであることの喜びをかみしめながら――

相手の存在を、強く強く意識しながら――

音楽♪ Joy of Life

サビのあたりから

そのままエンドロールに続く

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

ふたりのコンパス③

第6フレーム

『Off On』

【完】